

日本「アジア英語」学会ニューズレター第 11 号 Japanese Association for Asian Englishes

# JAF AE Newsletter

No. 11 (July 2002)



## 第 11 回 全国大会、白百合女子大学にて開催

日時：2002年6月29日(土)  
10:00 ~ 17:50

閉会の辞：大原始子（桃山学院大学）  
18:30 懇親会（学生ホール）

### プ ロ グ ラ ム

- 9:30 受付（2号館1階）  
大会総合司会：徳地慎二（宮崎産業経営大学）  
10:00 開会の辞：田嶋ティナ宏子（白百合女子大学）  
会長挨拶：本名信行（青山学院大学）  
10:10 - 11:40 特別講演：Dr. Saran Kaur Gill  
(Universiti Kebangsaan Malaysia)  
“Language Policy and English Language Standards in Malaysia: Nationalism versus Pragmatism”  
11:40 - 12:00 会員総会  
12:00 - 13:30 昼食休憩  
13:30 - 15:30 研究発表 司会：竹下裕子  
(東洋英和女学院大学)  
1. 「日本人学習者による「英語ニーズ調査」 検定教科書におけるタスクの選択・配列への応用」  
米本昭代（清泉女子大学大学院）  
2. 「ハワイ・クレオール英語」  
中山行弘（摂南大学）  
3. 「学校文法における不定詞の問題点 stop to think の意味と構造に基づくアプローチ」  
岡裏佳幸（青山学院大学）  
4. 「マカオでみるアジア英語の形成：英語スピーキング能力向上のためのプレゼンテーション理論と実践」  
奥田英樹（University of Macau）  
15:30 15:50 休憩  
15:50 - 17:50 シンポジウム  
テーマ：「アジア英語と日本の英語教育」  
司会：日野信行（大阪大学）  
発題：三宅ひろ子（青山学院大学）  
「アジアの『新英語』からみた言語意識教育の必要性」  
柴田亜矢子（青山学院大学）  
「検定教科書名から見える英語観の現状 - メタファ的視点からの一考察」  
榎木蘭鉄也（秋田県立大学）  
「インドの言語教育から見た日本の外国語教育」

### 大会をふりかえって

徳地慎二（宮崎産業経営大学）

第 11 回日本「アジア英語」学会全国大会は6月29日(土)に東京の白百合女子大学で開催された。今回は Universiti Kebangsaan Malaysia より Dr. Saran Kaur Gill をお招きし“Language Policy and English Language Standards in Malaysia: Nationalism versus Pragmatism”というタイトルで特別講演をお願いした。講演は、マレーシアにおける言語政策において英語の果たしてきた役割を興味深くご説明いただいた。講演の詳細は今回の Newsletter に掲載されている大原理事の解説をお読み頂きたい。

午後のプログラムは、米本昭代氏の「日本人学習者による「英語ニーズ調査」 検定教科書におけるタスクの選択・配列への応用」というタイトルの研究発表から始まった。発表では、実践的コミュニケーション力の育成を前提とした、検定教科書への現実社会タスク導入や情報の流れに配慮した明確な選定基準の設置が提言された。次に、中山行弘氏が「ハワイ・クレオール英語」というタイトルで発表を行った。発表では、ハワイ・クレオール英語の歴史と、具体的な音声・文法的特徴等について実例を持って説明が加えられた。次に岡裏佳幸氏が「学校文法における不定詞の問題点 stop to think の意味と構造に基づくアプローチ」という発表を行なった。発表では stop to think の多義性について指摘がなされ、学校文法で教える際の問題点について説明が行われた。最後に、奥田英樹氏が「マカオでみるアジア英語の形成：英語スピーキング能力向上のためのプレゼンテーション理論と実践」というタイトルの発表を行なった。発表においては、我々日本人が英語でプレゼンテーションを効果的に行うために取るべき方策について説明がなされた。

休憩を挟んだ後、プログラム最後のシンポジウム「アジア英語と日本の英語教育」が開催された。まず、司会者の日野信行氏がシンポジウムの概略について説明を加えた後、三宅ひろ子氏が「アジアの『新英語』からみた言語意識教育の必要性」について発表を行なった。発表では、ことばの多様性やこ

とばのしくみや働きを学ぶための言語意識教育が日本の英語教育に必要なことが指摘された。次に、柴田亜矢子氏が「検定教科書から見える英語観の現状メタファー的視点からの一考察」について発表を行った。発表では、文化を反映すると捉えられるメタファー的視点を我々が積極的に容認し英語教育に導入することの効果について提案がなされた。最後に榎木蘭鉄也氏が「インドの言語教育から見た日本の外国語教育」について発表した。発表では、インド英語の特徴を述べることにより多様な英語の種類を我々日本人も寛容に認めるべきであることが指摘された。

日本「アジア英語」学会の全国大会は今回で11回目となったが、会を重ねる毎に深みを増す内容が増えてきたと感じるのは私だけではなからう。これからの日本の英語教育において、日本「アジア英語」学会の影響を受けた英語教師が積極的役割を果たしていくことを願って止まない。

## 特別講演“Language Policy and English Language Standards in Malaysia: Nationalism versus Pragmatism” by Dr. Saran Kaur Gill を振り返って

大原始子（桃山学院大学）

マレーシアにおける英語に関する話題となると、おおよそ体制批判という論調になってしまうのだが、Saran 氏のその優しい表情が最後まで崩れることなく、理論的に、かつ気遣いを見せながら基調講演が進んだ。それは、氏の研究姿勢を表すものであると同時に、マレーシアにおけるインド系としての氏の立場を垣間見せるようでもあった。

マレーシアというと、英語化が進む隣国のシンガポールと比較されるせいか、英語があまり通用しない国だという印象がある。この地域に、英語の Southeast Asian variety なるものが出現しなかったのは、周知のように、その言語政策の違いによるところが大きいのであるが、両国ともに深く英国の影響を受け、英語が発達する素地に違いがあった訳ではない。現状を見据えた上で、マレーシアにとって、どの様な英語の発達が望まれるのかに重点を置いた Saran 氏の提案は、社会言語学的に大きな価値があるものだといえよう。

まず、マレーシア英語の標準化について、普及の構想を、工業化、メディア化、教育の地域的中心地としての確立の3点におき、特に、「言語の中心地としてのシンガポール」に対峙させるように「教育の中心地としてのマレーシア」を強調し、これは、過去の通貨危機と知的資源の必要性に基づくものであるとした。

次に、マレーシア英語の標準形へと話が及んだ。マレーシアにおける英語のバリエーションを Post-creole continuum として捉え、それぞれの音韻、統語、語彙特性に触れた後、Acrolect(上層語)への集約を一気に目指すのではなく、ビジネスシーンでの Acrolect(上層語)と Mesolect(中層語)の併用、つまり、2 社会方言使用、Bisociolectalism の勧めとも言うべき提案を行ったことが印象に残った。マレーシアは、元々、ピジンがクレオールになった古典的なクレオール社会とは異なるため、この lect の使い分けへはスムーズに移行することが予測される。まさに、この使い分けから一歩進んだ Diglossic な社会形態が、現在のシンガポールに観察できることを、シンガポール研究に関わる者として付け加えておきたい。

英語を母語としない地域の英語使用について語るとき、その際立った特徴を強調し過ぎたり、思い込みが過ぎたりすることがある。研究者は、現状を冷静に見極め、理論的かつ実証的に語ることがいかに大切さを教えてくれた講演でもあったように思う。

## アジア英語と日本の英語教育

日野信行（大阪大学）

今大会のシンポジウムの主題は、「アジア英語と日本の英語教育」という、まさに本学会の主要な関心を占める大きなテーマであった。司会者としての筆者のイントロダクションでは、アジア英語と日本の英語教育について考察するための枠組について、従来 of World Englishes (WE) 論の限界を指摘した。「ポストコロニアル英語」の価値の認知を本質とする WE 論では、日本のような Expanding Circle の英語は Outer Circle の英語に比べて低い地位しか認められず、また Expanding Circle の英語学習者は単に母語話者の模倣をすればよいと見なされている。期待を託すべきは WE 論よりも EIL 論である。

青山学院大学院生の三宅ひろ子氏は、英語の多様性に対する言語意識の養成について論じ、フィリピン英語のメタファー表現 20 項目に関して日本人大学生 90 名の理解度を測定した調査について報告した。このような教育の有効性は本名信行氏の『アジアをつなぐ英語』の中でも提唱されているが、その実践例として興味深い内容であった。

同じく青山学院大学院生の柴田亜矢子氏は、CDA (Critical Discourse Analysis) の視点に立ち、高校英語教科書のタイトル 25 冊についてやはりメタファーの側面から分析した。ふだんあまり意識することのない教科書タイトルにもイデオロギーが内包されていることを指摘し、そこから英語学習者が受ける影響についての注意を喚起するものであり、斬新な切り口であったと思う。

インドの専門家として知られる榎木蘭鉄也氏（秋

田県立大学)は、「インドの学校教育では『外国語』教育はほとんど行われていない」という事実についてまず述べたが、多言語・多民族国家における言語教育の様態を考える上でこれは確かに見逃されやすい点であろう。榎木蘭氏はまた、コミュニケーションに対するインド人の積極性には日本人も学ぶべきところがあると論じた。

大学院生である三宅氏と柴田氏の発題について付言すると、両者ともメタファーやCDAなどの今日の概念を意欲的に取り入れ、また若さによる経験不足をまったく感じさせない落ち着いた発表であり、多くの参加者が感銘を受けた様子である。質疑の時間には、河原俊昭氏、橋内武氏、矢野安剛氏、末延岑生氏をはじめとしてこの分野を代表する研究者からさまざまな質問やコメントが寄せられたが、その多くもこのお二人の発題に対するものであった。新進の大学院生の活躍のおかげで、日本のアジア英語研究や英語教育の将来に明るい希望を抱かせるシンポジウムになったと思う。

## 楽しい秋田弁(その1)

### A Variety of Japanese in Deep North in Japan

榎木蘭鉄也(秋田県立大学)

私は今までたくさんの言語を学んできたが、2年前、運命のいたずらで誰も知り合いがいない秋田に来て、はじめて秋田弁を耳にしたときの感動は今も忘れない。秋田は日本のDeep Northとも言える地で、ことばだけでなくいろいろな面で古き良き日本が残っている。以下、秋田弁の特徴を列挙していこう。

秋田弁の定番に「ンダ」がある。これは「はい」の意味である。丁寧に言うと「ダス」(語尾の母音が脱落し[das]となる。標準日本語の「です」に相当)をつけ、「ンダ」+「ダス」=「ンダス」となる。秋田弁では親しみを表すときは文末に「ナ」[na]をつける。よって「ンダナ」といえばもっと親しみがこもって「そうだなあ」くらいの意味になる。これに丁寧さを表す「ダス」を組み込むと、「ンダスナ」(発音は[ndas na])となる。うれしくなるほど味のある表現である。

秋田弁では、「っこ」を名詞につけることが多い。例えば、「酒」は「酒っこ」、「なべ」は「なべっこ」、「嫁」は「嫁っこ」となる。「っこ」は指小辞のひとつだと思われる。それに、「ヨ」も文中へ挿入する。これは英語のyou knowのような用法を持っている。例えば、「このめえヨ、酒っこ飲んでるとぎヨ、嫁っこもいね榎木蘭先生がヨ、うめごとってヨ」「んだ、んだ、関西人の榎木蘭先生、口(くつ)うめンダモノ」「んだすな」(「この前、酒を飲んでいたら、独身の榎木蘭先生が上手いことを言ってね」「そう、そう、関西人の榎木蘭先生は口が上手

いからね」「そうですね)」という具合である。

秋田弁の音声も面白い。子音の濁音化が最も絶妙である。「できない」は「できね」、「していくこと」は「すぐごど」となる。例えば、「アジア英語、研究すぐごどだば大事(でえじ)でヨ」「アジア英語、研究して、いがった」(「アジア英語は面白いから研究していくことは大事だからね」「アジア英語を研究してよかった」と言う。

鼻音化も印象的である。例えば、「まず」は秋田弁では「まんづ」[mandz]となる。「ごじゅう(五十)」は「ごんじゅ」となる。例文を挙げよう。「まんづ、いくらだべ」「ごんじゅ円」(「ねえ、いくらですか」「五十円」)。秋田弁には鼻音の脱落もある。例えば、「まんま」(ご飯)は秋田弁では鼻音が脱落して「まま」となる。ちなみに、「まま食ってきたんすか」(直訳:ご飯を食べてきたのですか)は挨拶として用いられている。

また、秋田弁では「イ」と「ウ」の境界が明確でなく、「すし」は「すす」のように聞こえる。「イ」と「エ」の違いも微妙である。「事務所」が「税務署」と聞こえて、戸惑ったこともある。「キ」と「チ」の違いも微妙である。「気持ちいい」が「チモツエ」と聞こえる。例えば、「温泉、チモツエすか」(温泉は気持ちいいですか)のように言う。

秋田に来てから、言語を研究する者として、身近な素材を疎かにしてはならないと痛感するようになった。次号では、古語の面影を残す秋田弁の語句を中心に紹介しよう。

新	刊	書	評
<b>『アジア英語辞典』</b>			
本名 信行(編集) 価格: ¥1,200			
単行本 - 271 pp. 三省堂 ISBN: 438511028X			

吉川寛(中京大学)

本学会員の本名信行、田嶋ティナ宏子、榎木蘭鉄也、河原俊昭4氏の編著による『アジア英語辞典』が6月に三省堂から発行された。「ビジネスマン、旅行者必携」と銘打っているようにその実用での便利さは言うまでもないが、この辞典は優れた読み物としての性格も持っている。先ず、全編に挿入されている22の囲み記事は、限られた紙面であるが情報量が大変多く、また、それぞれよく練られていて誠に興味深い。つい囲み記事を探して読むほどである。囲み記事に劣らず1730の見出し語そのものも大変面白い。通常、辞書は読むものではないが、この『アジア英語辞典』は、各語の説明が地域研究、異文化理解の宝庫のようでこれもどんどん読んでしまう。それぞれの地域担当執筆者の長年に渡る研究、調査のエッセンスが凝縮されているからであろう。

アジア英語が研究対象として及び実用として重要

であることは本学会員なら皆理解しているところであるが、このような実用利便性が高く且つ中身の濃い辞典の出現でより多くの一般の人々がアジア英語への理解を増すことも期待できる。発音をカタカナ表記にしたことも使い易さを考慮してのことと拝察する。何となく英米英語の「敷居の高さ」を感じていた人達には「目から鱗」の辞典といえるであろう。(編集注:この辞書はシンガポールの英字紙 *The Strait Times* にも大きく取り上げられました)

## 日本「アジア英語」学会 新理事紹介(任期:2002年4月から2年間)

- 本名信行(理事長、青山学院大学)
- 相川真佐夫(国際交流、和歌山信愛女子短期大学)
- 榎木園鉄也(NL、事務局次長、秋田県立大学)
- 大原始子(桃山学院大学)
- 加藤三保子(紀要編集、豊橋技術科学大学)
- 河原俊昭(会計、事務局次長、金沢星稜大学)
- 末延岑生(神戸商科大学)
- 竹下裕子(日本学術会議、東洋英和女学院大学)
- 田嶋ティナ宏子(事務局長、白百合女子大学)
- 津田早苗(紀要編集、東海学園大学)
- 徳地慎二(Web、ML、宮崎産業経営大学)
- 橋内武(桃山学院大学)
- 藤田剛正(会計監査、常葉学園大学)
- エリック・ベレント(清泉女子大学)
- 矢野安剛(会計監査、早稲田大学)
- 吉川寛(紀要編集委員長、中京大学)

## 2002年度アジア研修旅行のお知らせ

河原俊昭(金沢星稜大学)

2002年度アジア研修旅行担当理事の河原俊昭です。日本「アジア英語」学会では、毎年、アジアの国を一つ選び、その国の言語事情や教育事情を視察・調査するために、研修旅行をしています。2000年度はインドを選び、デリー、ハイドラバード、ムンバイの3都市を訪問しました。特に、ハイドラバードのCentral Institute of English and Foreign Languages(CIEFL)ではS.V. Parasher教授のご好意で、セミナー、交流会、史跡見学旅行などをおこないました。参加者の多数から、インドの言語事情がよく分かって大変有益な研修旅行であった、という感想が寄せられています。昨年はインドネシアを予定していましたが、現地が政情不安のために、残念ながら中止となりました。

今年度(2002年度)は、フィリピンへの研修旅行が予定されています。2003年の3月中旬を予定しています。マニラの中心部にあるデラサル大学を拠点として、一週間ほど滞在いたします。市内観光、デラサル大学の先生を講師に迎えてのセミナー、

授業参観など多数の活動が予定されています。今年度も多くの会員の方の参加をお待ちしております。詳しくは、担当の河原(kawahara@seiryu-u.ac.jp)、あるいは事務局までメールにてお問い合わせください。

旅行日程の詳細は、これから現地と打ち合わせしながら詰めてゆきます。下記に記したHPに随時、内容を更新してゆきますので、興味のある方は是非ともご覧下さい。

<http://www.kiwinet.seiryu-u.ac.jp/kawahara/studytour.htm>

## POSITION WANTED

インドのCentral Institute of English and Foreign Languages, Hyderabad(CIEFL)からの情報です。関心ある方は、直接、本人にコンタクトしてください。

Professor Zumar Lal Patil is a professor of English working for Central Institute of English and Foreign Languages, Hyderabad, India. He works for the Department of Training and Development. Presently, he is on a government-assignment to teach English to diplomats at Institute for International Relations, Hanoi, Vietnam. His three-year stint there came to an end in July this year and he is going back to his parent institute in India. He is interested in a job in Japan. That will give him an opportunity to understand the culture of the great country of the rising sun. For details, contact: znpatil@hotmail.com

## 会計から

### 日本「アジア英語」学会 2001年度収支決算書

収入の部			
費目	決算額	予算額	増減
<b>年会費</b>	<b>732,000</b>	<b>1,120,000</b>	<b>388,000</b>
(01年度正会員 117名)	585,000		
(01年度学生会員 16名)			
(00年度以前正会員 9名)	48,000		
(00年度以前学生会員 6名)	27,000		
(法人会員00年度,01年度1社)	12,000		
	60,000		
<b>全国大会</b>	<b>551,000</b>	<b>500,000</b>	<b>51,000</b>
(第9回)	301,500		
(第10回)	249,500		
	5,000	60,000	55,000
<b>モノグラフ販売</b>	<b>2,500</b>	<b>0</b>	<b>0</b>
<b>寄付</b>	<b>461,443</b>	<b>461,443</b>	<b>2,500</b>
<b>繰越金</b>			<b>0</b>
<b>2001年度収入合計</b>	<b>1,751,943</b>	<b>2,141,443</b>	<b>389,500</b>
支出の部			
費目	決算額	予算額	増減

通信費	203,618	200,000	3,618
ニューズレター印刷費	107,940	50,000	57,940
紀要制作費	268,350	350,000	81,650
文房具	22,418	30,000	7,582
全国大会 (第9回)	559,265 (348,925)	500,000	59,265
(第10回)	(235,340)		
人件費	45,100	60,000	14,900
インターネット接続料	23,520	23,310	210
印刷代	32,371	0	32,371
パソコンソフト	38,640	0	38,640
雑費	25,000	30,000	5,000
2001年度支出合計	1,326,222	1,213,310	112,912
2001年度収支差額	425,721	928,133	502,412

上記のとおり、ご報告申し上げます。  
2002年6月29日 会計 竹下裕子  
上記に相違のないことを認めます。  
2002年6月29日 会計監査 矢野 安剛  
会計監査 藤田 剛正

### 日本「アジア英語」学会 2002年度予算

収入の部				
費目	2002年度予算額	2001年度予算額	増減	
年会費	1,120,000	1,120,000	0	
(正会員 200名)	(1,000,000)			
(学生会員 30名)	(90,000)			
(法人会員 1社)	(30,000)			
全国大会	550,000	500,000	50,000	
モノグラフ売上	50,000	60,000	10,000	
繰越金	425,721	461,443	35,722	
2002年度収入合計	2,145,721	2,141,443	4,278	
支出の部				
費目	02年度予算額	01年度決算額	01年度予算額	増減(対予算)
通信費	200,000	203,618	200,000	0
ニューズレター印刷費	110,000	107,940	50,000	60,000
紀要制作費	300,000	268,350	350,000	50,000
文房具費	25,000	22,418	30,000	5,000
全国大会	560,000	559,265	500,000	60,000
人件費	50,000	45,100	60,000	10,000
インターネット接続料	24,060	23,520	23,310	750
印刷代	30,000	32,371	0	30,000
雑費	50,000	25,000	30,000	20,000
合計	1,349,060	1,287,582	1,213,310	135,750

## 会計からのお願い

河原俊昭(金沢星稜大学)

4月に竹下理事から会計を引き継ぎました河原俊昭です。よろしく申し上げます。

6月29日の第11回全国大会で今年度の予算案が了承されました。予算に基づいて、今年度も紀要の発行、ニューズレターの配布、全国大会開催などたくさんの方が予定されています。なお、今年度の会費の振り込みを済まされていない方々は、年会費の振り込みをお願いいたします。また昨年度以前の会

費が既納かどうか確かでない方は、会計担当の河原まで電子メールでお問い合わせください。  
(kawahara@sei-ryo-u.ac.jp)

## 編集委員会から

吉川寛(中京大学)

1) 『アジア英語研究』第4号が発行となりました。号を重ねる毎に充実されていき喜ばしいことだと思います。今回の編集にあたって査読者の方々、事務の方々のご尽力に紙面を借りまして厚くお礼申し上げます。第5号の原稿締切は2002年11月末(事務局宛て)です。奮ってご応募下さい。

2) モノグラフ1号、2号を販売中です。1号は1部500円、2号は600円です。モノグラフの売上の50%が学会の会計に繰り入れられますので、是非ご購入をお願い致します。お申し込みは事務局へお願い致します。

## 事務局からのお知らせ

### 1) 会則規約改正について

会計からもお願いしておりますが、年会費を期日までにお支払いいただけない会員の方がいらっしゃいます。2年以上会費の納入を怠った会員には学会出版物を送らない旨「警告」の手紙を出し、対処することにしたので、ご了承ください。

### 2) 国際交流について

昨年予定しておりましたインドネシアへの研修旅行は政情不安定という理由でキャンセルせざるをえませんでした。今年度の研修旅行は、2003年3月初旬から中旬にフィリピンに行くことが決定しております。詳細は、決まり次第会員のみなさまにお知らせいたします。

### 3) メーリングリストについて

会員の交流と情報交換のために、多くの方にメーリングリストに加入していただきたいと思っております。ご興味がある方、ご質問のある方は、事務局(奥付参照)あるいは担当の徳地理事まで電子メールでご連絡ください。

徳地理事のメールアドレス: [steve@hkg.odn.ne.jp](mailto:steve@hkg.odn.ne.jp)

### 4) 日本学術会議申請について

日本学術会議に5月末に申請書を送付しました。結果は秋に出ます。

### 5) 編集委員会より

紀要第4号が刊行され、大会に出席された会員の方々には配布されました。欠席された方には、このニューズレターといっしょにお送りいたしました。紀要第5号の投稿論文の締め切りは11月末となっております。

### 6) 次大会について

第12回全国大会は2002年11月30日(土)に奈

良県天理市の天理大学で開催されます。

## 第12回全国大会研究発表者募集

第12回全国大会(2002年11月30日(土)、於奈良県天理市の天理大学)で研究発表を希望される方(会員に限る)は、要旨(日・英どちらか)をA4用紙1枚にまとめて、10月7日(月)必着で、電子メール、FAXまたは郵送にて、事務局(奥付参照)までお送り下さい。

## CALL FOR PAPERS for the 12th National Conference on November 30, 2002 at Tenri University in Tenri, Nara

The Conference Committee invites submission of abstracts for papers. Submission is by e-mail, fax or mail. Abstracts for papers should be no more than 250 words in length. The deadline is Monday, October 7, 2002. Please send it to the JAF AE Secretariat (address below).

## 国際会議情報

### The 50th TEFLIN International Conference

The 50th TEFLIN International Conference is going to be held in Surabaya. Chosen to host the conference, we have decided to have Mojopahit Hotel, a five star hotel at 65 Tunjungan Surabaya, to be the venue for the seminar scheduled on 29-31 October 2002.

Theme: Asian Odyssey 2002: Explorations in TEFL

### 2002 International Conference English in Southeast Asia: Changing Responses to Challenging Times

Organization: Language Centre, Hong Kong Baptist University

Dates: 6 December - 8 December, 2002

Venue: Hong Kong Baptist University

For the details, see: <http://www.hkbu.edu.hk/~lcese/>

For any enquiry about the conference, please contact:

Mr. Derrick Stone

Email: LCESEA@HKBU.EDU.HK

Tel: (852) 3411 5825

Fax: (852) 2339 5936

<編集後記>

今回は、私の勤務校のある秋田の言語について駄文を書かせていただきました。人生のほとんどを関西で過ごした私にとって、秋田はインド以上に異文化です。

秋田は同質性が高く、県外者があまりいません。同姓率が高いので、ファーストネームで呼び合うことも多いようです。例えば、人口の7%が「佐藤」さんです。秋田には共同で農作業する伝統があるため、

和をもって貴しとする風土があります。ですから、秋田はのんびりとした人が多く犯罪が少なく平和な土地です。反面、のんびりすぎで商売下手で、お互いに仲が良すぎるためにプライバシーの概念がない人もいます。

秋田の自然と飲食物は最高です。米と酒はいうまでもなく、夏は、鳥海山のわき水で育った天然の岩がきが美味しい季節です。温泉で汗を流し、岩がきで酒を飲むと、極楽気分です。

ニューズレターへの投稿を歓迎いたします。エッセイ、情報、書評などをどしどしお寄せ下さい。

2002年7月31日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 榎木蘭鉄也

発行 (有)タナカ企画

事務局 〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25  
白百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550 E-mail: [tina2@gol.com](mailto:tina2@gol.com)

学会ホームページ:

<http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

**Professor Hiroko Tina Tajima**

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8525 JAPAN

FAX: 03-3326-4550 E-mail: [tina2@gol.com](mailto:tina2@gol.com)

JAF AE's homepage: <http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239